



知能検査の話 その1

2回シリーズで
お届けします。



「〇〇が心配なので、教育センターに相談に行って、(知能)検査を受けてください。」

夏休みに入ると、「懇談で担任から(上記のように)言われたので」といった相談の申込みが増えてきます(〇〇には学習や生活・行動、発達の様子などが入ります)。

学級担任から保護者に、教育センターでの相談や知能検査の実施を提案する場合は、事前に必ず校内支援委員会を開催し、複数の視点から検討した後、校長の決定により伝えるプロセスを経る必要があります。一方で、保護者から知能検査について聞かれる場合もあると思います。そこで本号と次号の2回にわたり、知能検査について触れたいと思います。

知能検査には、かつて本市でも実施していた集団式や、言語を用いない検査なども含め多くの種類があり、検査ごとに知能の捉え方や、それに伴い内容・構成が異なります。複数の検査を行った場合、結果(知能指数)には差が生じます。子どもの体調や気分などの影響も受けます。そのため、数値は幅を持たせて捉える(下図の**朱書き**部分)必要があります。

教育センターでは、知能検査実施の意味や相談者の希望・了解を確認した上で、就学相談では田中ビネー^{フアイブ}V(又はWISC^{フイスク}-IV)を、教育相談ではWISC^{フォー}-IVを実施しています。

< 昨年2月に日本版WISC-Vが刊行され、本市も今後導入の予定 >

知能検査を行う目的は、大きく次の2つです。

- ① 特別支援学校への入学，特別支援学級への入級，
通級による指導の適否の判断の一助。
- ② その子のつまずきの能力的な原因と対策を知る。

① こちらは主に就学相談での目的

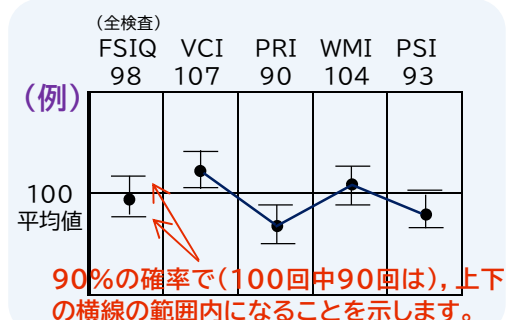
② こちらは主に教育相談での目的

結果説明で示すデータは、田中ビネーVでは知能指数(IQ)のみですが、WISC-IVではIQ(全検査IQ)と4つの指標得点が折れ線グラフ(下図)で示されるため、実施の目的として「知的能力の強いところと弱いところを知るため」とよく言われますが、日本版WISC-IVの刊行委員^{だいろくひとし}大六一志先生(元筑波大学教授)は、「間違いではないが、強・弱の説明ではWISCについての説明に留まる。子どもについて説明することが大切。」と指摘しています。

指標得点とは、15種類ある検査問題(下位検査)のうち、検査の作成時の標本調査で、回答傾向に共通性がある下位検査を束ねて命名し、得点化したものです。4つの指標と構成する能力は次のとおりです。

- 言語理解指標(VCI) : 言葉の理解力，説明力，推理力，言語的習得知識
- 知覚推理指標(PRI) : 視覚的情報を把握し，処理したり推理したりする力
- ワーキングメモリー指標(WMI) : 聴覚的情報を記憶し，処理する力，注意・集中力
- 処理速度指標(PSI) : 視覚的情報を速く正確に処理し，作業を速やかに進める力

各指標には複数の能力が含まれているため、実態に照らして、その子に関係している能力特性を検討します。その際、各下位検査が測定する固有の能力や、所定の分析方法から得られる情報、検査中の行動なども考慮されます。ただし…<次号へ続きます>



担当 学校生活適応支援アドバイザー(飯山・大瀧)
TEL 639-4392